

最大流量 過大に

進まぬ「前提工事」

ダム建設の根拠となってきた全国一級河川の最大流量（基本高水）が、約四十年間で一・五倍に引き上げられていた。国土交通省の懇つまに、「水増し」されてきた可能性はないのか。六日、馬淵達夫国交相が八ッ場ダム（群馬県長野原町）建設中止の前提を事実上撤回した中、基本高水が注目される利根川水系を歩いて考えた。

（篠ヶ瀬佑司）

ダム建設根拠 40年で5割増し

高さ六尺の堤防は、やはり存在しなかった。同県高崎市のJ R高崎駅から南西へ約一キロ。利根川支流の烏川にかかる城南大橋付近①の地点のすぐ下流の右岸堤防高は、せいぜい一・五尺か二尺程度で、しばらく歩くと堤防はほとんどなくなると。

「六尺の堤防」は、国交省関東地方整備局が作成した「基本高水の計算に使われた八斗島上流域

基本高水の引き上げ幅が大きい河川

	1946年	1964年	2006年
1 利根川(+12000)	10000	17000	22000
2 荒川(+10630)	4170	4170	14800
3 荒川(+10400)	5600	7100	18000
4 吉野川(+10100)	13900	17500	24000
5 淀川(+10050)	6950	8650	17000

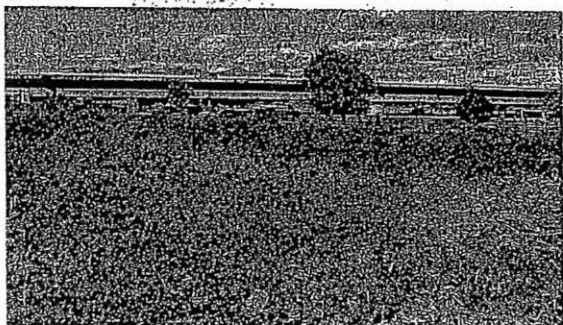
※数字は立方メートル毎秒。
 蔵治光一郎・東大愛知演習林長岡へ



の前提条件との資料に明記されている。国は一九八〇年の「利根川水系工事実施基本計画」で、四七年のカスリーン台風並みの雨（二三日間で三九〇）があった場合、利根川の治水基準点・八斗島（同県伊勢崎市）に最大毎秒一立方方尺の水が流れると試算した。

つまり毎秒二万二千立方方尺の水は「六尺の堤防」などができた場合にのみ、流れることにな

実績値より机上で備え



利根川の支流、烏川の右岸堤防。この付近の「計画堤防高」は6尺だが、1.5倍程度しかないと群馬県高崎市で

「二〇〇〇特報部」で細地に、測量の跡があった。昨年十一月にも同地点た。関東地整高橋河川国道事務所に関わらせるに計算されている可能性と、城南大橋付近から下流に「一・ほど、堤防用に測量をした」という。

ところが「六尺の堤防ではなく」堤防高は三・四尺程度」（担当考。しかも「施工の範囲を示しただけで、用地買収の話しはしていない。完成めどは言えない」）

（四）状態だから、完成は相定めた。

別の場所でも、計算の「前提条件」は見あたらな。上信電鉄の上州新原（同県甘楽町）から北約一キロ。利根川の支流、錦川にかかる吉井大橋付近②の地点の右岸は、約五尺の切り立っていたが、国交省の資料では、「二〇二二」が弱の「計画堤防」が示されている。

三十年たってもできない堤防かさ上げを「計算のための前提条件」にし、いいのならば、河川官庁は基本高水を意のままに操ることができてしまう。関東地整の資料によれば「毎秒二万二千立方方尺は、今後想定される将来的な河川整備の状態をも含めた検討」の結果だといふが、「将来的な整備」も、水増しのための架空の計画ではない

の。